

う。

最後がないものねだりの批判をひとつ述べよう。本叢書は、荻野の「空間」「移動」「他者」を視点として戦争その後の社会をどのように規定しているかを解き明かすことを目指している。第I巻は荻野の視点を生かした論稿が多く、共同研究の醍醐味を表している。しかしその反面、石田の視点や他の研究が必ずしも活かされていない。とりわけ石田の論稿は社会学の教科書のように見事な論稿であったし、荻野も意識している断絶論と連続論の議論に関して貴重な整理と視点を提供している。荻野は最新の社会学理論を踏まえた荻野社会学にもとづいて論を展開し、石田はオーソドックスに先行研究を整理して活かしている。この両者の視点や分析枠組みは本叢書の原論的な位置にあるが、それら（や個々の論稿）が十分に意識され、その成果を活かすほど成熟した共同研究とはなっていない。

シンポジウムで第II巻編者の島村が率直に「大学の研究所の共同研究としてはよく出来た叢書である」と自己評価したが、まさにその通りだと私も思う。しかしその反面、このレベルまで来たらもう一歩高みに行けたのではないかとつい欲が出てしまうほど第I巻は力作揃いだったと思う。

## ◎書評にこたえて

荻野 昌弘（関西学院大学）

お忙しいなか、丁寧かつ刺激的な書評を寄稿していただいた蘭信三、福間良明両氏に心から感謝を申し上げたい。そして、まずは、叢書「戦争が生み出す社会」の第一巻『戦後社会の変動と記憶』について、全体としての整合性がやや欠けるのではないかというおふたりのご指摘についてお答えしたい。

たしかに二巻、三巻に比べ、一巻がやや統一性を欠いていることは事実である。今から思えば、最後に執筆者全員で最終的な原稿の方向性を確認し、原稿も繰り返してお互い読み合わせれば、より完成度の高い共同研究の成果になっていただろう。ただ、すでに個々の研究が進んでおり、それぞれ個性ある論考を準備していたので、全体の統一性を重視した場合、やや個性に欠ける内容になる危険性もあったように思われる。とはいえ、やはり調査の段階から脱稿まで一貫して共同で進める研究こそ、一番まとまりのある成果になることは疑いない。もう少し、研究会の回数を増やすなど反省すべき点はあり、現在先端社会研究所で進めている共同研究にはぜひ活かしたい。

以上のような反省点を踏まえたうえで、この機会に一巻がめざしていた「戦争に関する社会学」の包括的枠組みについて再考してみたい。

叢書のタイトル通り、本書は、「戦争」そのものよりは、戦争を契機としてその後に生み出される社会について論じたものである。「戦争が生み出す○○」という視点に立てば、ある意味で、戦争そのものに関する歴史記述も、戦争自体ではなく、戦争が生み出した表象のひとつであると考えることができる。

戦争が生む社会の変容を捉えるうえで、まず本書が着目したのが空間である。なぜなら、いかな

るタイプの戦争であっても、戦争とはまず支配可能な空間の拡張をめざすからである。戦時中から国家間による陣取り合戦が行われ、国家が支配する範囲が変わっていくと同時に、支配する空間の様相も大きく変わる。新たな基地の建設から爆撃による被害にいたるまで、戦時中に空間は開発され、かつ破壊される。この空間の生産と破壊は必然的に人の大移動を生み出す。兵士だけではなく、戦災を逃れるために移動する避難民、疎開者などさまざまなひとびとが移動を余儀なくされる。これは、評者のひとりである蘭氏の研究が示すところでもある。

以上の点からわかるのは、空間の変容と移動とは密接に関係しており、空間そのものがめまぐるしく変化していくほど、ひとびとの移動の頻度も高まるのではないかということである。戦争は、まさに空間の変容と移動を加速化させる大きな契機となっている。そして、この空間の変容と移動の関連性を経験的に捉えるための重要な指標として、人口や土地利用史などに注目すべきなのである。なお、軍用地の再利用として太田市と鈴鹿市のふたつの事例を取り上げたが、これには理由がある。それは、東京や大阪ではなく、地方都市の形成において軍用地が果たして役割を考えたかったからである。太田市は、戦前から中島飛行機があり、工業都市として発展したのに対して、鈴鹿市は戦時中に海軍工廠がおかれ、戦時期に新たに開発された都市であり、ふたつの異なる成立期を背景にした都市の比較をするため、この二つの都市を選んだ。

もうひとつ指摘しておきたいのは、空間の変容がどのように認識されるのかについても捉えられなければならないという点である。戦争の痕跡をとどめないかたちで復興が進めば、しだいに景観から戦争の傷跡は消えていく。戦争というできごとは日常生活から忘却されていく。ただ、その痕跡が完全消えてしまうことはない。また、ほとんど痕跡が消滅していても、ひとびとの記憶のなかには残存している。在米被爆者やフィリピンにおけるレイプの記憶が、そうした記憶群である。在外被爆者は、戦争や植民地化などによって、境界がしだいに変容するなかで、境界を越えて移動し、常に境界のはざまにおかれたひとびとである。その背景には貧困がある。フィリピンのひとびとは境界が変容するなかで、支配者が次から次へと変わり、一方的に被害を被ったひとびとである。こう考えると、境界の変容や空間の編成と差別とは密接に関わっている。福間氏が書評の最後に言及されたように、戦争の問題は差別の問題でもある。

ところで、すでに『戦争社会学の構想』を刊行している「戦争社会学研究会」とのシンポジウムを通じて、「戦争の社会学」については、まだ十分にお互いが理解できる共通の学術的基盤が形成されているとはいえないと感じた。今後も、より一層の討論を通じて、この領域を深化させていきたい。2015年度の日本社会学会のシンポジウムのひとつは「戦争をめぐる社会学の可能性」であり、それは新たな討論の場になるだろう。